

図書館だより



No. 9

平成 29 年 1 月 27 日

2017年がスタートして、早1ヶ月。みなさん、よいスタートを切ることができたでしょうか。それぞれの立てた目標に向かって、突き進んでいってください。みなさんが目標を成し遂げられるように祈っています。

さあ今年も図書館はみなさんと本との素敵な出会いがたくさんあるよう、お手伝いをしていきます。また、昨年好評だった制作体験も企画したいと思いますので、図書館へどんどん足を運んでください。

巻では2017年本屋大賞のノミネート10作品が発表されたり、以前図書館だよりでも紹介した恩田陸さんの『蜜蜂と遠雷』が第156回直木賞を受賞したり(第156回芥川賞は山下澄人さんの『しんせかい』でした)、村上春樹さんの4年ぶりの長編小説が来月発売されたりと、気になる本の話も続々と入ってきます。2017年はどんな本が人々の心をグッと掴んでいくのでしょうか。楽しみですね。図書館発信でもおすすめの本を紹介していきますが、みなさんの「今、気になる本」も教えてください。



*酉年にちなんで鳥を愛でる

498-ア『世界の美しい鳥』 パイ インターナショナル

世界中の美しい鳥たちを一挙に見ることのできる写真集です。色鮮やかな羽を全身にまとったもの、愛らしいシルエットを持つもの、佇まいから貫録を感じるもの、見たことのないたくさんの鳥たちがその美しい姿で見る人の心を楽しませ、和ませてくれます。また、1ページ1ページじっくりと見ていると、単にかっこよかったり可愛かったりするだけでなく、「鳥って、こんなに表情豊かな生き物だったんだな」ということも感じられます。巻末には名称、体長、主な生息地がまとめられていますので、お気に入りの1匹を見つけたら、どこの国に行けば本物に出会えるかチェックしてみましょう。

*2017年本屋大賞ノミネート作品

913.6-オ『ツバキ文具店』 小川 糸 || 著 手紙

ポッポこと雨宮鳩子は鎌倉で先代の後を継ぎ、「ツバキ文具店」を営んでいる。「ツバキ文具店」は代書も請け負っており、ポッポの元には書き物の色々な依頼が舞い込んでくる。その中には、明るくない内容を綴る手紙の依頼もある。けれど、どんな手紙にもその人の大事な想いがこもっている。その人の心に寄り添って、ポッポは字を考え、筆を選び、紙を選ぶ。大切な想いが相手にきちんと届くように。

読むにつれ、大切な人にふと手紙を書きたくてきます。また、バーバラ夫人や男爵、QPちゃんなど近所の愛しい住人たちとの交流、残された手紙で知った先代の祖母の想いが心を優しく包んでくれます。

作って楽しむ2月の行事

2月の行事といえば、節分とバレンタイン。最近の節分は、豆まき以上に恵方巻きにスポットが当たっているのか街のあちこちで「恵方巻き」の文字を目にするようになってきました。みなさんの家でも節分には恵方巻きを食べていますか。恵方巻きも自分で具材を考えて、巻いてみるのもきっと楽しいですね。

またバレンタインには毎年図書館内でも展示を行っています。チョコレートのお菓子作りに精を出す人が多くいるかと思えます。手軽に作れるものから本格的なものまでレシピ本も豊富な種類が出ています。本を手にとって「今年は何を作ろうかな」と考える時間もまた楽しいものです。今年メッセージカードの制作コーナーも開設し、より充実したバレンタインの展示を行いますので、バレンタインに向けても図書館を活用していきましょう。



バレンタインのメッセージカードを作ろう

制作コーナー開設期間: 1月30日(月)~2月14日(火)

制作に必要な道具は図書館で揃えてあります。手ぶらで気軽に作りこぎください。

可愛いメッセージカードを作り上げましょう。



596.2-カ『巻きずし』 飾 卷子(福岡 恵美) || 著 ブティック・ムック

目にも楽しい巻きずしの本。最近ではデコスweetsがブームになっていますが、巻きずしだって負けてはいません。お花や動物などの可愛い巻きずしに加え、ハロウィンやクリスマスなどの行事にぴったりの巻きずしもあります。作り方の行程を見ていると、「こんなの難しくて、私には出来そうにない」と怖気づいてしまいそうになりますが、難易度の記載がされていますので、まずは簡単なものから挑戦してみましょう。

鬼や「福」という文字の巻きずし、恵方巻きの作り方も載っていますので、今年の節分には手づくりの巻きずしでお腹いっぱいになってください。

596.6-ム『CHOCOLATE BAKE』 ムラヨシ マサユキ || 著 主婦の友社

板チョコで作るチョコレート菓子のレシピ集。クッキーもマフィンもケーキもおいしそうなのに、見た目がおしゃれ。板チョコ以外の材料も身近にあるものだけを使っているのだから、材料探しに苦労することはありません。そして、種類も豊富でクッキーだけでなんと25種類もレシピが載っています。また、白ゴマ(チーズと白ゴマのクッキー)や干しイモ(干しイモとあんずのマフィン)、甘納豆(甘納豆とシナモンのガトーショコラ)など、和な材料を使ったものもあり、気になります。

まだバレンタインまで時間がありますので、色々試作し、味を楽しみながら本番の一品を決めてみてください。

🇯🇵 ニッポン再発見 🇯🇵

ニッポン再発見、第8回は四国地方（徳島・香川・愛媛・高知）の4県です。400年の歴史を持つ阿波おどり、世界三大潮流と呼ばれる「鳴門海峡」の渦潮などの見どころを持つ徳島県。ソウルフード「骨付鳥」や、「あんもち雑煮」など、うどん以外のグルメも充実し、アートな島「直島」や醤油製造とオリーブが有名な「小豆島」を有する香川県。日本最古の温泉「道後温泉」があり、世界にもその名を広める「今治タオル」の産地でもある愛媛県。幕末の志士 坂本竜馬や中岡慎太郎の生まれ故郷であり、世界ジオパーク（地球を学び、丸ごと楽しむことができる場所）にも認定された「室戸岬」や四国最長の大河「四万十川」を有する高知県。と、どの県も旅してみたくなる魅力がたくさんです。

また、四国といえば、四国八十八ヶ所霊場めぐり。全行程はなんと1400キロにもおよぶそうですが、一生に一度はこの巡礼の旅にも挑戦してみたいものです。

*いつかは私も体験したい

186-ラ 『フランスからお遍路に来ました。』 マリー=エディット・ラヴァル || 著 イースト・プレス

旅行文学好きのフランス人少女が大人になり、言葉も通じない国・日本での冒険を決意したのはフランスからスペインを横断するサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼中でした。西洋と日本の巡礼。準備から、実際に四国をめぐる様子、そして高野山の弘法大師へ結願のお礼をし、無事にパリのアパートマンのカギを回すまでが、古今の旅行記の印象的な言葉と共に綴られています。右足、左足、「タック」「カラン」…、杖をアスファルトへつくときの柔らかい音、鈴の音色、ただひたすら足を前へ進め八十八の寺院をめぐる魂の巡回。「奇跡とは水の上を歩くことではなく、今この瞬間に緑の地球の上を歩いていることであり、今、享受できるこの美しさと平和をありがたく思うことである」（ティク・ナット・ハン） 四国遍路には違う宗教の人たちでさえ魅了する、美しさとパワーがあります。

*今治タオルにも危機があった

586-サ 『今治タオル 奇跡の復活』 佐藤 可士和 || 著 朝日新聞出版社

「今治タオル」はいまや全国に知られるブランドですが、「もうダメだ」というところまで落ち込んだ時代があったのだそう。そこから、どんな努力を重ね、復活を果たしたのでしょうか。その様子が起死回生のブランド戦略を練る著者の佐藤さんと、彼を信じて組合をまとめ、戦略の実践を行った組合理事長、立場の違うふたりの視点から書かれています。

一目で今治タオルとわかるロゴマークの考案、タオルソムリエ資格認定やタオルマイスター制度の導入、いいモノを作るための品質基準の制定や見直しなど、今の「今治タオル」があるのはこうした隙のない戦略を実践してきた結果なんだというのが読んでいる私たちにもよく伝わってきます。読み終わった後には、「今治タオル」を使って、その良さを自分でも体験したくなります。



*アートを身近に感じる島

706-フ 『直島 瀬戸内アートの楽園』 福武 総一郎/安藤 忠雄ほか || 著 新潮社

瀬戸内海に浮かぶ人口約3000人の小さな島「直島」 1990年代からベネッセによって、現代アートによる町づくりが行われ、「現代アートの聖地」と呼ばれるまでになった島です。島には美術館があり、野外のあちこちに作品が展示され、「家プロジェクト」によって芸術作品に再生された民家があり、アートを楽しめる宿泊施設があり…、と島中が芸術作品で溢れています。島をちょっと歩けば、アートと触れられる、そんな距離感で日常にアートが溶け込んでいるというのは、とても魅力的です。写真を眺めていると、この島で日常を忘れ、心ゆくまで自然とアートに包まれて過ごしてみたいくなります。その日が実現する日を夢見ながら、まずはこの本で「直島」のアートめぐりを楽しんでみてください。

🌸 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 🌸

今月は横溝正史の『獄門島』(B913.6-ヨ 角川書店)を読みました。名探偵 金田一耕助、みなさんは知っているでしょうか。みなさんにとっては“金田一少年”のおじいちゃんと言った方がピンとくるのかもしれませんが、金田一耕助のシリーズを読むのは『八つ墓村』に続き、これが2冊目です。

戦友の遺言に導かれ、獄門島という瀬戸内海へ浮かんだ島を訪れた金田一耕助。名前からして恐ろしいこの島で、恐ろしい難事件が起こるのです。被害者となったのは美しい三姉妹。「これはもしや、こういうことか!？」と金田一耕助と一緒に何度もあれこれ推理を試みるのですが、彼も私もなかなか真相には辿りつけません。先に犯人に気付いたのは、もちろん金田一耕助。ネタバレになってしまうので、むやみなことは言えませんが、犯人にも驚いたし、その後にも衝撃的な結末が待っていて切なさを感じました。読みやすく、おもしろく、ハラハラが止まらない。…金田一耕助シリーズ、ハマリそうです。 【今井】

次回の読書会で取り上げる「沈黙」が収録されている『レキシントンの幽霊』(B913.6-ム 村上春樹) を読みました。「沈黙」は物静かで他人の悪口を言ったり愚痴をこぼしたりしないいかにも温厚な人物が、心の内に持つ恐怖を語ります。彼の話に飲み込まれその恐ろしさを共有した後、ふと我に返ると、それはいつ自分の身に降りかかってもおかしくないことに気づくのです。この本には7編の短編が収録されていますが、すべて底なしの恐ろしさを秘めた作品でした。もちろん、村上春樹によって提示されるその恐怖は、ありきたりのものではありません。そうした恐怖の深淵に触れた後

「七番目の男」では、海辺で友人を津波にさらわれた男が四十年の時を経て、その海に向き合っとう語ります。「私たちの人生で真実怖いのは、恐怖そのものではありません。なによりも怖いのは、その恐怖に背を向け、目を閉じてしまうことです」あなたも村上春樹が見せるこの深い恐怖を味わいに、2月9日(木)の読書会に参加してみませんか。 【鈴木】

